悪いことばかりの一日が終わる

またバス停を間違えて、鼓楼の手前玄武門で降りてしまった。夜もすでに更けて、人通りの少なくなった中央路から北京西路を目指して、僕はとぼとぼと歩いている。師範大学の招待所まではまだはるか。悪いことばかりの一日の終わりに、最後のボディーブローだ。

名付けようのない感情が胸の奥底でざわついていた。針のひとつつきでもしようものなら、得体のしれないマグマが吹き出してきそうだった。もしも子供だったら、エンエンと泣いて、吐き出してしまえるのだけれども。

しかしまた一方で僕は、この名付けようのない感情が、今日一日の運の悪さが原因だとばかりは言えないような気もしていた。何ものか、言い当てがたい何ものかが少しつつ水位を増してくるようだった。それはたぶん僕の中国旅行そのものに関わっているような気がするのだけれども。

薄暗い歩道に並木の木立がざわついていた。

クルマのヘッドライトが通り過ぎる。

店仕舞をする店舗。

僕は南京の夜を歩く。

言い当てがたい何ものかに、今にも飲みつくされそうになりながら、かろうじて踏み止まっているかのようだった。

本当にもしも、泣いてしまえたら、と僕は思う。

＊

今日の朝、南京師範大学の留学生招待所で目覚めてから、僕は本日の方針を決めたのだった。

まず南京港客運站まで行って、武漢行きの船の情況（発船時間とか料金）を確認し、できたら予約チケットを買うこと。招待所に戻って、安い部屋と交換してもらうこと（お昼頃にはチェックアウトの客が出るので、もしかしたらドミトリーと換えてもらえるかもしれない）。午後からは、孫文の墓、中山陵へ行き、また市内のいくつかの観光ポイントをまわること。

「ウン！　完璧だ」

と、自らを励ますようにして、僕は南京の街に足を踏み出した。

師範大学脇のバス停から三路のバスに乗って、まずは鼓楼へ出る。つもりが、ひとつ手前のバス停で降りてしまった。これがまず最初。

大体において、その中心が花壇やら記念碑やらになっているロータリ

ー形式の交差点というのは大きな交差点で、絶好の目印になるのだけれども、実は南京という街にはこの種の交差点が実に多いのだ。つい「あっ、ここだ」と思ってしまって、バスを降りてしまう。さらに悪いことには、南京は他の都市よりもバス停とバス停との距離が少し長いようなのだ。ずいぶん乗っていると思っても乗り過ごしたバス停の数は意外と少なかったりする。だからまた、バス停ひとつ分の距離を歩くというのがとてもしんどいのだった。

鼓楼まで歩いて、そこからまたバスで中山碼頭まで行った。中山碼頭は長江をへだてた対岸の浦口碼頭との間で渡し船が行き交う埠頭で、今しも到着した渡し船からたくさんの乗客が吐き出されたところだった。屋台に毛の生えたような泣面（ラーメン）屋が店の準備をしていた。数台のリキシャが客を待ちかまえていて、行き過ぎようとする僕に声をかけてくる。

中山碼頭から長江沿いに一〇分ほど歩いていくと、南京港客運站の乗船口がいくつかと售票処の建物があった。

まだ朝早い時間だったからだろうか、售票処はそんなに込んでいなくて、何人かが窓口に列をつくっているだけだった。

售票処の入口には上りと下りの船の時刻表が掲示され、入口を入ったところには一等から五等までの運賃が掲示されていた。

それらの情報を考えあわせると、

〔寧（南京のことか？）―漢口　快一班　四等、五四元〕

というのがよさそうだった。南京発は二一：〇〇、漢口着は一〇：四〇。船中二泊ということだろう。

予約窓口に並んで、

「明天到漢口、四等」

と告げる。

「××××？」

窓口の女性は何事かを尋ねたが、理解できないので口ごもっていると、

「ニーシーツォンナーライデマ（どこから来た）？」

と、眉をしかめながら尋ねた。

「日本…」

聞かれるままに、僕は答えたのだった。

窓口の女性は、日本人だと分かると「あっちへ行け」というように、さも迷惑そうな顔をしながら隣の窓口の方をあごでしやくった。

仕方なく隣の窓口に並びなおしたのだが、また同じようなやり取りのあとで、その窓口の女性はもとの窓口の方を指し示すのだった。

あっちではこっち、こっちではあっちと言われて、僕は途方に暮れてし

まった。
日本人だとバレたのが悪かったのかもしれない。
実は手持ちの人民幣がほとんどなくて、ＦＥＣしか持っていなかったのだけれども、もしかしてＦＥＣでもチケットを貰えるかな、と考えたのだった。窓口でうまくチケットを買えそうになったとしても、支払いのときにＦＥＣを差し出したら、結局同じように日本人だとバレて、たらいまわしにされただけだっただろう。
外国人でも船に乗れないわけはないのだから、強引にＦＥＣを突き出して強引にチケットを買う、ということも考えられたのだけれども、その方法だと一等か特等のチケットを外国人料金で買わされるのがオチだ。それに窓口の女性の迷惑そうな応対ともう一度向きあう気もおこらなかった。なんとかして人民幣を手にいれてから、明日もう一度出なおそう、と考えた。
それにしても交通機関のチケットが買えなかったのは初めてのことだったので、僕は少しうろたえた。
售票処のベンチに腰を下ろして、気を落ち着けるために煙草を一服した。
ふーっと息を吐き出すと、何者かが肩を叩く。
なんだろうと思って振り向くと、一見掃除婦風のおばさんがカードのようなものを示しながら、何事かを告げる。
そのカードをよく見ると『罰款』という文字が目について、その瞬間、僕は思い当たる。
喫煙禁止違反なのだ！
「二元」
と言いながら、服務員のおばさんは僕を售票処の前へ連れ出した。
申し開きもできないので、僕は二元（ＦＥＣ）を差し出した。
初めてＦＥＣ札を目にするのか、おばさんは札をつくづくと眺め、思案し、他の人に尋ねたりするのだった。
まさに踏んだり蹴ったりの南京港客運站をあとにして、再びバスを乗り継いで留学生招待所へと戻った。

鼓楼から三〇分近くも歩いて、ようやく留学生招待所にたどり着くと、ちょうど日本人の二人連れがチェックインしようとしていた。安い部屋が空いていたら換えてもらおうと思っていたのだが、彼らとフロントのやり取りを聞いていると、やはり高い部屋しか空いていないようだった。
部屋を移るのをあきらめて、気分一新のために部屋に戻ってお茶を飲み、ゆっくりとした。

お昼近くになり、腹も減ってきたので、南京師範大学の正門前に軒を並べる安食堂で食事をし、午後からはピクニックがてらに中山陵へ行ってみることにした。

中山陵は南京の東はずれ、紫金山のふもとにあり、その近くには明孝陵（明の開宗、朱元璋の墓）もある。入国以来ずっと街中をうろついてきたので、久しぶりに山の中でゆっくりとしたいという気もしていた。

まず朝と同様に三路のバスで鼓楼へ出る。つもりが、またもや手前のバス停で降りてしまった。仕方がないのでとぼとぼと一五分ほど歩いて、ようやく鼓楼到着。

休憩を兼ねて、鼓楼公園へ入った。

鼓楼は南京を首都とした明建国当初（一三八二年）に建造されたもので、当時、鼓楼で打ち鳴らされた太鼓の音は城内のすみずみまで響き渡ったといわれる。

南京の中心、鼓楼の上から市街を眺めてみようと思って入場したのだけれども、鼓楼をひとまわりしても上へ登る入口はない。どうやら楼上に登れるようにはなっていないらしい。がっかりして公園のベンチでため息をついた。

気をとりなおして、まず明孝陵へ行くことにした。鼓楼の脇が二〇路のバスの始発点になっていて、終点が明孝陵なのだった。

地図では確かにそのように記されているのだが、いざ始発のバス停を捜すと、どうしても見つからない。仕方なく、北京東路をバス路線に沿って歩き出した。途中のバス停でバスに乗るつもりだったのだ。二〇分近くも歩いただろうか、二〇路のバス停などどこにもないのだった。地図をよく見てみると、どうやらいつのまにかバス路線を外れてしまっていたようなのだ。茫然として、また鼓楼まで戻り、一応もう一度始発点を捜すがもちろん見つからない。

気分を落ち着かせるために煙草を吸いながら地図を眺めていると、新街（南京一の繁華街）付近から、九路のバスで中山陵へ行けることを発見した。満員の路線バスを初めてタダ乗りして（本当に満員で、車掌から切符を買うことができなかったのだ）新街へ。

新街から少し歩いて、九路の始発点へ行ってみると、果たして九路という表示を掲げたバスが停車してあったのだが、扉を閉じたバスには運転手も乗っていない。煙草を吸いながら、しばらく様子を見ていたのだが、一向に動く気配がない。

なかなか思いどおりにいかないので、これはもしかしたら今日は中山陵へは行ってはいけないというお告げなのかもしれない、と考えた。それならそれで、今日は中山陵をあきらめて、中華門を見に行くことにしよう

かと、そちらの方に歩き始めた。
ふと振り返ると、さっきまで九路のバスを待っていた所に、別の九路の二両連結バスが来て、すぐに発車し、僕を追い越していった。あわてて追いかけようとするのだけれども、気付くこともなくバスは行ってしまった。呆然としてその場に立ちつくし、街角に消えたバスを見送ったのだった。
だが、またしても僕は気をとりなおすのだ。
くよくよしたり、がっかりしたり、呆然と立ちつくしたりしている僕を、一方では僕は味わっていた。それは記憶の中の、すでに色もあせた失敗にうずくまっている過去の僕とよく似て、いじらしくも感情に飲みつくされた僕だった。だが今の僕は、感情に寄り添って、僕をなぐさめたりはしない。ただ僕を無色の視線で見つめ、さりげなくあるとき僕身に証言するだろう。

現代的な繁華街という印象の新街（シンチエ）の賑わいを離れて、南京市街の南端、中華門へと至る。
中華門は城門とはいいながら、まるで要塞のように巨大な建築物だった。日本人の感性から言うと、それは城門というよりも城そのものなのだった。アーチ型の通路を持つ域壁は四重にもなっていて、三〇〇〇人もの兵士を潜ませることができたという。中華門の威容を目にした瞬間に、いまさらながら僕は思い当たる。
同じ城とはいいながら、中国の城と日本の城とは全く違うのだ。日本の城は支配者の住居なのに対して、中国の城というのは街そのものなのだ。その規模はほぼ南京市の市街地に一致する巨大なものだ。城壁は南京市街をほぼ囲うようにして存在する。つまり、日本の戦というのは支配をめぐる戦であり、城は支配権を誇示するメディアであるのに対して、中国の城というのは「外部」というものつまり全体に対する敵というものを明確に意識したものだということだ。
石造りの城壁のてっぺんに腰を下ろして、黒い瓦屋根の家々や通りを行き交う自転車、自動車などを眺めながら、僕は「敵」という言葉を思考に乗せていた。
もしかしたら中国人というのは、いつも「敵」というものを心のどこかで意識しながら、生きてきたのかもしれない。戦国期や王朝の交代期は言うに及ばず、平和時にあっても漢民族は常に北方の民族の浸入に脅え、闘い、また実際に元朝、清朝など征服もされてきた。漢民族の北方への脅えが万里の長城などという強迫的な建築物の建造に駆りたてたとも言えるだろう。

「敵」を感じるということ、それはまた「味方」を、言い替えれば自らというものを感じるということでもある。「敵」との対峙線において民族というものをつむぎだし、常に固定していくということでもある。民族というものが強靭であればあるほど、自己変革は激しくまた血まみれたものにならざるをえない。

西洋というものに直面したとき、それから対極的と言ってもいいような違いを見せた日本と中国の近代史の根底にはおそらく民族という言葉の内実の違いが根ざしている。日本民族と中国（漢）民族とは民族が違うということだけではない。もっと大きな問題は民族という概念自体が違うということだと思う。日本民族と中国（漢）民族とはおそらく次元の違う問題なのだ。

「敵」と対峙し、征服し、あるいは征服され、同化し、また対峙し、ということを繰り返して、中国というものは、漢民族という個別性を越えて、ある種の普遍性を歴史的に形成してきたような気がする。その普遍性の内実について、僕はこれ以上語る知識も能力も持っていないのだけれども。

一方で、外との葛藤がほとんどないまま、つまり「敵」というものに直面することのないまま、自らを歴史的に形成してきた日本民族は、当然のように「和」をもって価値とする。「和」は矛盾を隠蔽する共謀でもあり、あるいは矛盾を常に「和」の方向に回収する機構でもある。そのようにして日本民族は、かつては中国文化を、そして後には西洋文化を、自らは破局的なカタルシスに陥ることなく回収してきた。日本民族というものがあるのではなく、あたかもアメーバ的に自在に変幻する「和」の機構、その作動だけが民族性の根拠ででもあるかのように。

もちろんどちらが正しいという問題ではない。ただ日本と中国という二つの国の根底には二つの異なった歴史的な原理が作動しているということ、ただ単に国土の大小や経済力の大きさによっては比較できない差異というものがあるということは知っている必要がある。

歴史的には日本の「和」というものは自らが変幻することによって相手を受容し、回収するという、受け身の「和」であったと言える。自らが変幻することによって、相手を決して「敵」としてきわだたせない、彼我の対峙線を常になし崩し、無効にするという「和」の機構であった。その内部の中心には決して譲れない日本民族の心とでも言いうるものがあったのかどうかは知らない。あったとも言えるし、そんなものは実はどこにもなかったのだとも言える。ただ、相手との対峙において、それは中心的な問題としては作動しなかった。アメーバ的な「和」の原理だけが作動したのだ。

近代に至って、日本の「和」は突然のように、攻撃的な「和」（それはおそらく「和」とは言えないのかもしれないが、日本人の心情としては「和」だっただろう）に転じたかのように見える。それはあたかもキリスト教的な、普遍性と軍事力に裏打ちされた「和」のようだった。日鮮一体とか、満蒙とか、大東亜とかいうイデオロギーが、攻撃的な「和」を装飾した。だがいかんせん、日本には軍事力はあったかもしれないが、普遍性は決定的に欠如していた。片や朝鮮、中国という民族に対して、それと対峙し、それを飲みつくす普遍性というものが欠如していた。ただ軍事力だけが空虚を支えていたのだ。軍事力が「我」というものをきわだたせた瞬間に、おそらく日本は初めて「敵」という存在に遭遇した。歴史的に初めて「敵」に対峙した日本は軍事の暴走以外のいかなる手立ても持たなかったと言える。自らに対する壮大な勘違いと、その結果に対するうろたえだった。だが、うろたえにしては結果はあまりにも悲惨だった。

要塞のような中華門からバスに乗ると、すぐに火車の中華門站だ。南京市の裏口のような、いなか駅のたたずまいを見せる中華門站の陸橋を渡り、衣料品や雑貨の屋台が並ぶガードを抜け出ると、雨花台烈士陵園。かつて国民党支配の時代、一〇万人以上の共産党員と反国民党の人々が処刑されたという近代の処刑場でもあった。南京の観光地の至る所で目にすることができる雨花石という石の産地でもある。

南花石というのは、白、朱、黒など、さまざまな色合いの小石で、それを容器の水に沈めて、浮かび上がる色合いを楽しむというものなのだけれども、その赤い石の赤は血の色ということになっている。雨花台で処刑された無数の人々の血がしみついた赤なのだ。

南京市の南はずれ、雨花台をいちべつしたあと、南京のはずれ、「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館」へと向かう。

市街地を離れたバスはがらんとした未開発の産業地帯とでもいう印象の郊外へと走っていく。地図を頼りにバスを降りて、人に尋ねて、ようやく、ひっそりとした「紀念館」を見つけた。すでに午後五時前で、チケット売場の窓口は閉まっていた。

「あーあ、間にあわなかったか」

とがっかりしていると、窓口の人らしい男が入口を示しながら、何事か声をかける。

「もうチケット売場は閉めたから、早く、さっさと見てこい！」

ということだったのだろう。

急いで中に入ると、『遇難者三〇〇〇〇〇』というレリーフが目に入ってくる。敷地の中には、日本軍による虐殺の場面を描いたレリーフや地区

ごとの記念碑が立てられている。敷地内には、老夫婦が一組だけ。レリーフの前に立ち止まり、囁くように言葉を交わしあっていた。

小さな館を入っていくと、無数の骨が展示されていた。今しも発掘されたばかりというような様子だった。脇に掲示された説明によると、一九八五年にこの記念館が建設されたときに、その工事中に掘り出されたものだということだ。日本の中国侵略と暴行の罪証である、と説明されている。

今なお、南京の地下には無数の人骨が埋まっているのだ。

雨花石の赤は、南京大虐殺で殺された中国人たちの血の色でもある。

バスで市街地へと戻り、夫子廟へ。

建康路と名付けられた大通りから脇道を入ってしばらく行くと、下町の商店街のような賑やかな通りに出る。行き交う人々や商店の賑わいを避けながら、通りを突き抜けると夫子廟の門前だ。鳥居のような石造りの門には『熱烈祝賀全国最大孔子青銅塑』という赤い文字の横断幕が掲げられていた。

夫子廟の門前は運河に続く池になっていて、そのまわりにはたくさんの屋台が出ていた。夕暮れ近いひとときを、人々は小吃（シャオチー）を食べながら、憩っているようだった。夫子廟の脇には、門前街を意識してだろうか、中国風の連物が並んでいる。門前の花壇の囲いには、老人たちが雀のように座り込んでいた。その脇に腰を下ろして、歩き疲れた一日の終わりに小さな吐息を吐いたのだった。

南京車站行きの路線バスに乗って、汽車站へ。

腹が減ってきたので、晩ごはんを食べに昨夜の食堂へ行こうと思ったのだ。

路線バスはどんどん進み、ふと気付くと汽車站を通り過ぎて、どんどん行ってしまった。汽車站をかなり離れて、到着した所は南京火車站（鉄道駅）だった。終点の南京車站を汽車站と思い込んでいたのだが、実は火車站だったのだ。

火車站でしばらく折り返しのバスを待っていたのだけれども、なかなか来ないので、仕方なく歩き始めた。あたりはすでに暗くなっていて、足は重かった。

一〇分ほど歩いていると、通りがかりの男が何事か話しかけてきた。疲れていたし、早く晩ごはんを食べてゆっくりしたかったので、「我是日本人」と言いながら、振り切ろうとするのだが、男は日本人だと分かると「ちょうど良かった」とでもいうように、まくしたてるのだ。

中国語の断片と筆談で理解できたところでは、「列車の中で財布をすら

れたのでお金を貸して欲しい」ということだった。
　男はサラリーマン風のスーツに身を包み、嘘ではないという証しに身分証を取り出して見せる。
　その上司らしい恰幅の良い男は、××百貨大楼の支配人という名刺を差し出した。せっぱつまった様子で、これから食事をしなければならないから、一人一〇〇元で三人分三〇〇元を貸して欲しいと言う。
　手持ちが三〇〇元弱しかなかったので、一五〇元（ＦＥＣ）を貸してあげた。
　男が差し出した手帳に、日本の住所と名前を書くと、男たちはあとで必ず返すからと言い残して、消えた。
　ひとりになって歩き始めると、後味の悪さが込み上げてきた。だまされたのかもしれない、という思いがあとになって湧いてくるのだった。男の差し出した身分証と出張中のような男たちの様子、サラリーマン風の身なりなどで、僕は信用してしまったのだけれども。（その後、男たちからの送金はもちろんない。はなからサギにあったのかもしれないし、日本人は金持ちだから三〇〇元ほどのお金をわざわざ返す必要もないと考えているのかもしれない。もう会うこともない日本人のひとりに礼儀をつくすこともないと考えているのかもしれない。）
　込み上げてくる後味の悪さを飲み下すようにして、僕は歩き続けた。ようやく見覚えのあるガードに至り、ようやく食堂が見えてくる。
　食堂に入ろうとすると、昨夜の少年が僕を見つけて顔を輝かせる。
「よく来たな」というように、昨夜の席に座らせる。
　料理をつくる女の子たちも同じだった。ただ女王人だけが代わっていた。顔つきから考えて、おそらく昨夜の女王人の姉なのだろうと想像できた。
　彼女は昨夜の女主人と同じように親日的で、様々なことを筆談で尋ねてきた。料理を食べながら、片言の中国語で答えたり、筆談で答えたり。
　女の子のひとりが恥ずかしそうに何事かを尋ねる。
『她叫你写日語、你好！（日本語で你好はどのように書くのか聞いています）』
『こんにちは」
「早上好、是…」
『おはようございます』
「晩上好、是…」
「こんばんは』
　夜も更けてきて、僕はお金の交換のことを切り出した。
「ＦＥＣを人民幣と交換してくれませんか」

当惑する女主人に、筆淡と中国語で、僕はＦＥＣで船のチケットを買うととても高いこと、人民幣で中国人に成りすませば安く買えることなどを伝えた。

女主人の当惑はその額の大きさにあったらしい。僕は五〇元、できたら一〇〇元を交換して欲しいと申し出たのだった。

「船のチケットを買うのにどうしてそんなにたくさんのお金がいるのですか。いったいどこへ行くつもりなの」

「漢口まで。五〇元くらいかかります」

僕を連れてきた少年は、女主人に

「交換しよう、交換しよう」

とさかんに勧めていた。

女主人はポケットから、今日の売り上げらしい札束（六―七〇元）を取り出した。

五〇元を交換する。もう少し交換してほしかったのだが、手持ちがないと言うのだった。

『不会是假的杷（偽物ではないだろうね）？』

『你们日本人説的冒牌（日本人は嘘つきだからね）』

女主人の不安をしりめに、僕は客引きの少年に手を振って店をあとにし、昨夜のように三五路のバスで鼓楼へと向かった。

間違えて、ひとつ手前のバス停で降り、三〇分ばかりも歩いて、南京師範大学脇の雑貨屋で煙草とビールを買い、ひっそりとしたキャンパスを通り抜けて、ようやく留学生招待所に戻ったところだ。

身も心もしんどかった一日がこうして終わる。